CUSTOMER CASE STUDY:
October 2026



あなたと共感、ハーモニー・バンク
福岡ひびき信用金庫

福岡県一円と山口県下関市、大分県中津市を事業区域とし、地域に根ざした金融機関として事業を展開する福岡ひびき信用金庫。経営改善支援や資金繰り支援などの金融機能を提供するとともに、顧客の本質的な課題を的確に把握し、金融・非金融の両面から伴走支援の深化に取り組んでいます。IT 領域では、2025 年に策定した DX 戦略に基づき、デジタル技術の活用を前提に経営や業務の在り方を見直し、業務効率化と、より付加価値の高いサービスの提供に向けた経営革新を進めています。

### 導入環境およびサービス

- VMware Cloud Foundation® 9.1
- VMware vSphere®
- VMware NSX®
- VMware® vDefend ™
- VMware Cloud Foundation® Operations Fleet Management
- VMware Cloud Foundation® Operations

### ソリューション

稟議システムやワークフロー、CRM といった勘定系以外の情報系システムが稼働するサーバー基盤として、VMware Cloud Foundation 9.1（以下、VCF 9.1）を用いたオンプレミスの仮想化基盤を運用しています。この基盤はデータセンター内に構築しており、仮想化、ネットワーク、セキュリティ、運用管理を統合した基盤です。セキュリティ面では、VMware vDefend の分散ファイアウォールにより、仮想マシン単位で通信を制御しています。さらに、VCF 9.1 へのバージョンアップ後に VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS を導入し、従来の境界型ファイアウォールでは防げない仮想マシン間の不審な通信や脆弱性を悪用する攻撃を検知できるようにしました。現在は検知モードで運用しており、今後は不審な通信や攻撃通信の遮断も含めた運用を検討しています。運用管理面では、VMware Cloud Foundation Operations Fleet Management（以下、Fleet Management）のライフサイクル管理機能を活用し、パッチ適用作業の効率化と運用負担の軽減を図っています。

### 導入の目的

- 業務システムが稼働するサーバー基盤の刷新
- 肥大化する脆弱性対応やパッチ適用の運用負担の軽減
- フロンティア AI によって高度化する脅威への対策強化

### 導入効果

- VMware Cloud Foundation 9 への移行と 9.1 へのバージョンアップを内製で実現
- VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS により、仮想レイヤーのセキュリティを強化
- Fleet Management のライフサイクル管理機能によりパッチ適用作業を効率化

# VMware vDefend により、高度化する脅威への対策強化を実現 運用の高度化・省力化に貢献する VMware Cloud Foundation 9.1

福岡ひびき信用金庫では、伝統的にシステムの内製化を重視しながら、新しい技術やソリューションを積極的に採用してきました。15 年以上にわたり VMware ソリューションを活用し、さまざまな業務システムが稼働するオンプレミスの仮想化基盤を運用してきました。今回、ハードウェア更改に伴い、VMware Cloud Foundation 9 を金融機関としていち早く導入し、オンプレミス基盤を刷新するとともに、運用の効率化とセキュリティの強化を進めています。

## 【課題】
## 内製運用における高度化する脅威への対応負担が懸念材料に

同金庫は、地元の企業や住民とのネットワークを通じて地域経済の持続的発展に努めており、相互扶助型の金融機関として 7 万人を超える会員を有しています。現在はひびしん地域密着型金融推進計画を掲げ、信用金庫が持つ「つなぐ力」をさらに進化させ、地域の持続的な発展を目指して「地域密着型金融の深化」「独自性のさらなる発揮」「永続性ある経営の確立」を主要な柱として事業を行っています。

そんな同金庫では、以前から外部ベンダーに頼ることなく各種システムの内製化を進め、IT 主権の考え方を堅持しながら、コストの最適化と迅速なインフラ・アプリケーション展開を両立できる環境を整備しています。また、高度化する脅威に対処し、金融機関に求められる強固なセキュリティを維持するため、継続的にセキュリティ投資を行っています。事業計画においては、AI 技術の業務活用、DX 推進、データ利活用の 3 つをテーマに、業務を支える基盤整備を進めています。

同金庫の多くの業務システムを支えるサーバー基盤は、長年にわたりデータセンター内に構築したオンプレミスの仮想化基盤です。内製化を進める同金庫で

vmware by Broadcom

はセキュリティ対策も自ら担っていますが、高度化する脅威に対して安全な基盤を維持するには、セキュリティパッチを迅速かつ継続的に適用する必要があります。この対応は、少数精鋭で運用する同金庫にとって将来的な負担増につながることが懸念されていました。「内製による脆弱性管理の負担は小さくないため、クラウドリフトも意識しています。ただし、大規模な環境ではパブリッククラウドのコストが高くなる可能性もあるため、オンプレミス基盤で、いかにセキュアな状態を維持するかが重要です」と、業務執行役員 システム部 部長 兼 DX 推進室長の吉田 篤史氏は説明します。

## 【ソリューション】<br>セキュリティ強化に向けた<br>仮想パッチ機能やライフサイクル管理機能に注目

同金庫が新たな基盤づくりに着手したのは、多くの業務システムが稼働するサーバー基盤のハードウェア更改のタイミングでした。従来のサーバー基盤では、15 年以上にわたり VMware ソリューションを採用してきました。安定した稼働実績に加え、内製運用を通じてノウハウや知見を蓄積してきたことから、継続して VMware ソリューションを選択してきた経緯があります。一方で、既存技術に固執するのではなく、新しい技術を積極的に取り入れながら基盤を整備する風土が根付いていると吉田氏は説明します。

また、仮想レイヤーで通信を制御できる VMware NSX を 10 年以上前から利用していました。新基盤の構築時期と VMware NSX のマイクロセグメンテーションライセンス更新時期が重なったことから、個別エージェントを導入して同様の通信制御を行うサービスも検討しました。サーバー仮想化基盤についても他のソリューションを候補に挙げましたが、最終的に同金庫の要件に合致したのが VMware Cloud Foundation 9（以下、VCF 9）でした。「マイクロセグメンテーションを単体ソリューションとして導入する場合と比べ、VCF 9 全体で考えたほうがコストパフォーマンスに優れていました。管理が二重になるといった運用面の懸念もありました。サーバー仮想化基盤については内製運用の知見が蓄積されているため、費用面で折り合えば、安定した稼働実績を持つ VMware vSphere を選択したいと考えていました」と、システム部 調査役の宮地 真之氏は語ります。



福岡ひびき信用金庫
業務執行役員 システム部
部長 兼 DX 推進室長
吉田 篤史氏

「ソリューションを組み合わせることで同じようなことはできるものの割高になってしまいます。VCF 9 のオプションとして揃えるほうがコストメリットは大きいです」

福岡ひびき信用金庫
業務執行役員 システム部 部長 兼 DX 推進室長 吉田 篤史氏

機能面では、VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS に注目しました。「脆弱性が見つかった場合、修正パッチが提供されるまでの期間に加え、業務への影響確認や検証が必要なため、すぐにパッチを適用できないことがあります。VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS には、脆弱性を悪用する通信を検知・遮断できる仮想パッチ機能があり、よりセキュアな環境づくりに役立つと考えました」と宮地氏は説明します。

また、従来はパッチ適用などを手動で行っていましたが、Fleet Management によるライフサイクル管理機能を活用し、アップデート作業を効率化できる点も高く評価しました。「脆弱性対応では、原則として最新のバージョンで運用することを庫内方針としており、従来は手動でアップデートする必要がありました。こうした作業を効率化できることは、少人数で運用する私たちにとって大きなメリットです」と吉田氏は説明します。

結果として、新たなサーバー基盤の核となるソリューションには、仮想化、ネットワーク、セキュリティ、運用管理を統合する VCF 9 が選定されました。



福岡ひびき信用金庫
システム部
調査役
宮地 真之氏

「オプション適用が同じ基盤内で完結できるため、同じ GUI で機能を追加しやすい。設定作業が容易なことも運用している立場からすると助かります」

福岡ひびき信用金庫
システム部 調査役 宮地 真之氏

## 【今後の展望】運用負担軽減とセキュリティ強化に貢献する VMware Cloud Foundation 9.1

現在のサーバー基盤は、6 台のホスト上で VDI 環境を含む約 200 台の仮想マシンが稼働するオンプレミス基盤であり、勘定系以外の情報系システムを数多く運用しています。具体的には、稟議システム、ワークフロー、CRM、Web サーバー、ファイルサーバーなど、ベンダー提供のシステムから内製アプリケーションまで、その種類は多岐にわたります。営業担当者が外出先で顧客情報を入力し、API を介して勘定系システムと連携するなど、高い安定性が求められる仕組みも稼働しており、600 名を超える全職員の業務を支えています。

既存環境からの移行では、約 2 か月で VCF 9 への移行を完了しました。その後、定期的にパッチを適用し、VCF 9.1 へバージョンアップした後、VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS 機能を導入しました。「VCF 9.1 へのバージョンアップは、パートナーが公開するブログなどを参考に、試行錯誤しながら自分たちで実施しました」と宮地氏は説明します。VCF 9.1 ではコンポーネントの増加に伴いサーバー構成の変更が必要でしたが、約 1 か月で内製による対応を完了しました。「VMware に関する情報は数多く流通していますが、リリース直後の VCF 9.1 は情報源が限られていたため、VMware に勉強会を開催してもらったこともあります。AI も活用して情報を収集し、検証を重ねながら進めました」と吉田氏は移行プロセスを振り返ります。

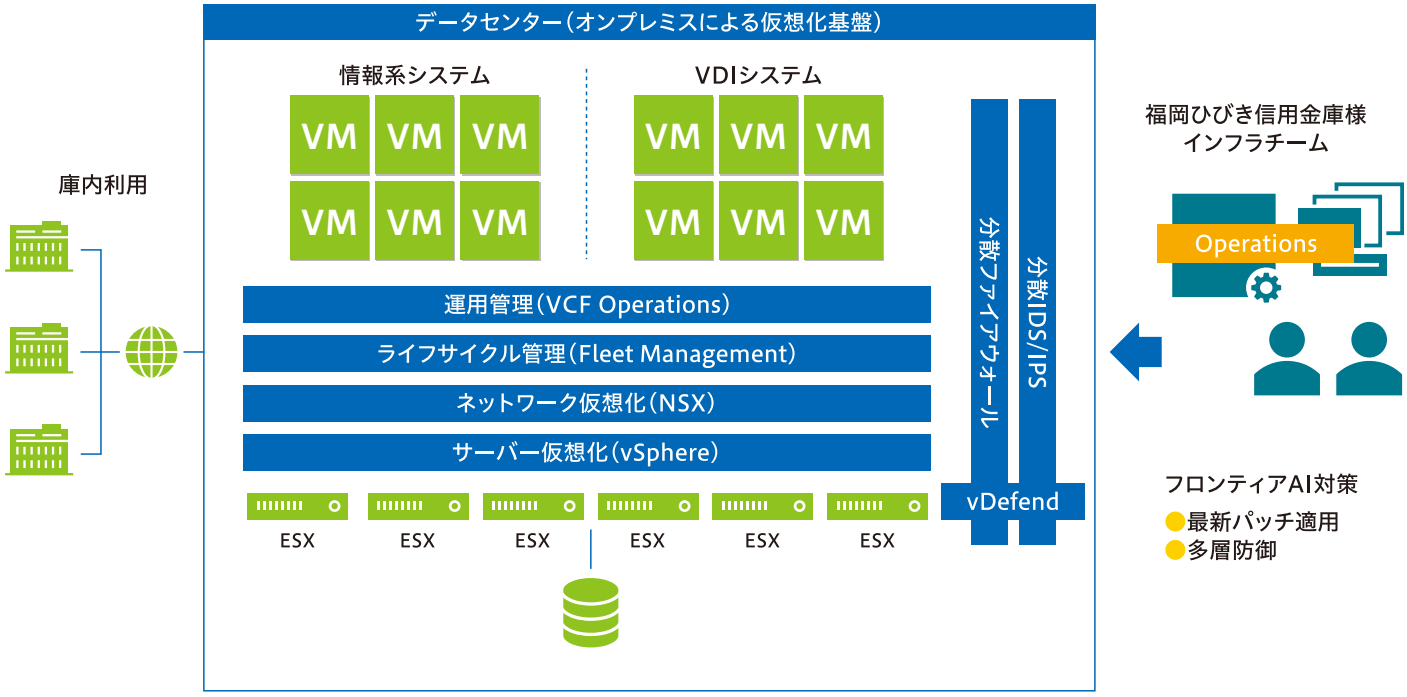
日々の運用では、VCF Operations を活用し、各種システムのリソース状況を可視化するダッシュボードでシステムの健全性を把握しています。また、VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS は現在、通信の検知のみを行っており、今後は遮断を含む運用への移行を検討しています。

手動で行っていたパッチ適用について、Fleet Management のライフサイクル管理機能を活用することで、作業の効率化と工数削減が期待されています。一方、手動作業のノウハウが十分に蓄積されていることから、効果を実感するのはこれからだといいます。「フロンティア AI によって攻撃の高度化・高速化が進み、脆弱性対応の迅速化が一層求められると予想されますが、ライフサイクル管理機能の活用によって運用負担の増加を抑えられることを期待しています」と宮地氏は語ります。

また、システム全体では複数のセキュリティコンポーネントを組み合わせたゼロトラスト環境を整備しており、VMware vDefend の分散 IDS ／ IPS には、内部の多層防御を担う役割を期待しています。「クライアント環境は ZTNA をはじめとするゼロトラストの仕組みで保護し、サーバー側は VMware vDefend で防御する位置付けです。分散ファイアウォールと分散 IDS ／ IPS により、ラテラルムーブメントを抑止するサーバー間通信だけでなく、クライアント・サーバー間通信への対策も強化できました」と吉田氏は評価します。

VCF 9.1 については、従来の運用ノウハウを生かしながら、統合されたインターフェースでセキュリティと運用管理を強化できる点を高く評価しています。「複数のソリューションを組み合わせても同様のことは実現できますが、個別に調達するとコストが割高になります。オプションとしてさまざまな機能を導入できる点は大きなメリットです」と吉田氏は語ります。宮地氏も、「オプションの適用が同じ基盤内で完結し、同じ GUI から機能を追加できるため、設定作業が容易です。運用する立場として助かっています」と評価します。さらに、VCF Operations を通じて、各コンポーネントの証明書や認証情報の管理状況を一元的に把握できるようになり、更新漏れの防止につながる点もメリットとして挙げています。

実際の導入支援に関しては、リモート経由で設定内容を画面




構成概要図

で共有しながら確認作業を行うなど、VMware から迅速かつ手厚い支援を受けています。「VCF の導入は、日本においても事例の少ない新しい取り組みとなるため、しっかりサポートいただけました。長くソリューションを活用している立場からすると、以前から助けていただく機会も多く、企業に寄り添う姿勢を非常に評価しています」と吉田氏は説明します。

現在は、VCF 9.1 を基盤としてサーバー環境を運用し、金融機関に求められる高度なセキュリティ要件に対応しています。さらなるセキュリティ運用の強化に向け、仮想マシン間を含むネットワーク通信フローをダッシュボード上で可視化できる Security Intelligence に注目しています。「現在は検知モードで運用している分散 IDS ／ IPS について、今後は実際にどのように遮断へ移行するかも含めて検討します。また、通信状況やポリシーを可視化できる Security Intelligence にも期待しています」と宮地氏は語ります。

コンテナ環境を実装できる VMware vSphere Kubernetes Service（VKS）については、今後の要件に応じて検討する方針です。また、Memory Tiering などの新技術も、将来の更改時に検討できるとしています。自然言語で設定を支援する AI 関連機能にも期待を寄せています。今後も内製による環境整備と運用を継続しながら、VMware の新たなソリューションを活用していきたいと、吉田氏は展望を語りました。




vmware by Broadcom

Copyright © 2026 Broadcom. All rights reserved.
The term "Broadcom" refers to Broadcom Inc. and/or its subsidiaries. For more information, go to www.broadcom.com. All trademarks, trade names, service marks, and logos referenced herein belong to their respective companies. Broadcom reserves the right to make changes without further notice to any products or data herein to improve reliability, function, or design. Information furnished by Broadcom is believed to be accurate and reliable. However, Broadcom does not assume any liability arising out of the application or use of this information, nor the application or use of any product or circuit described herein, neither does it convey any license under its patent rights nor the rights of others.
Item No: 261008_bc-vmw-customer-case-study-fukuokahibiki 10/26